

手 賀 沼 通 信 (第310号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

あけましておめでとうございます
今年もよろしく願いいたします

今月は弟のエッセイ3篇です。

特別寄稿

「別れのプラットホーム」(私の懐かしい歌
2) 新田自然

以前、このテーマで「星の流れに」と「山小屋の灯」を取り上げたが、この終戦から一拍置いた昭和22年は、歌謡曲の世界にとっても再出発の大変意義ある年であった。8年も続いた戦争という軛から解放され、少し落ち着いてきた社会は、徐々に活力を取り戻し、数多くの新曲が発表され、活気を帯びて来たのであった。勇ましい軍曲調はなくなり、新しい時代の到来を予感したものになった。しかし戦争体験が、人生に大きな襞を作ったように、この頃の流行歌には、まだ戦争を引きずったものも多かった。

この曲「夜のプラットホーム」は、昭和22年二葉あき子の歌唱によって発売されると、大ヒットし20万枚を超す売り上げとなった。若い恋人たちの別離のシーンをうたった、切なくも美しいラブソングであると理解された。タンゴ調の、切れの良いメロディは、あき子の声にマッチして印象深く響いた。歌い出す前のイントロに列車の汽笛のような「ポーっ」という音やベルのような音も効果的であった。

しかし、やはりこの歌も重い時代を背負った歌であった。

夜のプラットホーム

星はまたき 夜ふかく
鳴りわたる 鳴りわたる
プラットホームの別れのベルよ
さよなら さよなら 君いつ帰る

作詞奥野椰子夫、作曲服部良一 によるこの歌は、彼女が初めて歌ったものではなかったのだ。昭和14年、淡谷のり子によって映画の挿入歌として歌われたものであった。奥野が、新橋駅で見た出征兵士を見送る妻の姿をモチーフに作詞した。しかし日中戦争のさなか、出征兵士の戦意を殺ぐものとして検閲にかかり、発売禁止となったのだ。

発売にあたった日本コロムビアと、作曲者であった服部良一は諦めきれず、洋盤 [I'll be waiting] (待ち侘びて)として、作曲者をレオ・ハッター(良一・服部のもじり)、作詞者・歌手ヴィック・マックスウェルで発売したところヒットした。この曲が検閲の対象にならなかった理由は不明であるが、当局が経緯を承知しなかったのか、あるいは知っている、国民に理解されなければ諒としたのか。しかし、それにしても、このような曲をよく出したものだと、その勇敢さに頭が下がる。この曲は戦後になっても、当時有名であったアルゼンチンタンゴのミゲル・カロー楽団によってレコーディングされた。

この頃は戦意発揚の時代で、歌は大衆の心を奮い立たせる「軍需品」として、軍歌や戦意発揚の勇ましい歌を奨励し、少しでもそれに触れるものは、発売禁止、自粛などを命じた。しかし大衆は、けっして勇ましいだけの歌は口にせず、世の中に浸透して行かなかった。

優れた軍歌も出たが、裏でひっそりと歌われるのは「湖畔の宿」(高峰三枝子)や「支那の夜」(渡辺はま子)、「別れのブルース」(淡谷のり子)などであり、当局が禁止したにもかかわらず、戦場に慰問に訪れた彼女たちに、これらの曲のリクエストが集中した。軍歌でも「戦友」「露営の歌」など、哀調をこめた歌詞やメロディが好まれた。「死んで来い」という軍部に対し、兵士達は必ずしも盲目的に従いたくなかったのである。前線の軍隊上層部も、明日死ぬかもしれない兵士のリクエストを否定できなかったと思われる。

この頃の服部良一はヒットメーカーで「雨のブ

ルース」(淡谷のり子)、「一杯のコーヒーから」(霧島昇 ミスコロムビア)、「湖畔の宿」(霧島昇 渡辺はま子)などヒット作品がある。彼は軍歌や軍歌調の作品を残していない。

作詞者の奥野椰子夫は昭和 16 年に「琵琶湖哀歌」を作詞している。

なぜこの歌が二葉あき子によって吹き込まれたかは定かでないが、戦後、淡谷のり子が日本コロムビアから他社に移転していたからではないかと思われる。淡谷のり子も歌っているが、レコードとして売り出されず、そのことを彼女は終生残念がった。二人の歌を聴き比べてみると二葉あき子のほうが歌詞のイメージにピッタリしていると思った。淡谷盤が発売されたら、どちらが受けただろうか。一つの曲がヒットするには、時代背景、タイミング、歌詞、メロディ、編曲、歌手など、いろんな要素がかみ合って実現するものだ。

二葉あき子は大正 4 年(1915 年)広島市大須賀町二葉(現在の東区二葉の里)の生まれ、東京音楽学校師範科(現東京芸術大学音楽科)卒業、芸名は生誕の地(安芸の国、広島市二葉)からとった。教師を経て、コロムビア専属歌手としてデビューした。流行歌手として、東京音楽学校卒は珍しく、ほかに藤山一郎がいるくらいである。

昭和 20 年 8 月 6 日、彼女は父の郷里三次へ向かう列車の中にいた。10 分遅れて芸備線の列車が広島駅を出て、トンネルに入った時、原爆がさく裂し、危うく難を逃れた。そんなこともあって、この歌を戦争犠牲者の鎮魂の歌として終生歌い続けたという。ほかに「フランチェスカの鐘」、「水色のワルツ」などのヒット曲がある。2011 年、96 歳没。広島市の二葉の里にはこの歌の歌碑が立てられている。

当時小学生であった私には、そういった歌の誕生にまつわる逸話は知る由もなく、正直いってそれほど強く印象付けられた歌ではなかった。別稿で述べるが彼女の歌としては「フランチェスカの鐘」のほうがはるかに強いインパクトがあった。近年になってこの歌の出自にかかわるものを読み、とりあげてみたくなった。今日は終戦記念日、明日 8 月 16 日は彼女の命日でもある。

特別寄稿

「女ひとり」の謎(私の懐かしい歌 3)

新田自然

「♪きょーとー おーはら さんぜんいん…」
なんと気分の良い入りだろう、デュークエイセスのセカンドテナー吉田一彦の、のびやかな高音で始まるこの歌を聴いたとき、京都の大原の古刹に佇む和服の女性が鮮やかに浮かび出した、この歌の出だしは詞と曲が絡み合ってじつに快い。

この歌のリリースは昭和 40 年、作詞永六輔、作曲いずみたく、歌デュークエイセスによる「日本の歌」シリーズ第 2 作として発表されたものである。

- 一 京都大原三千院 恋につかれた女がひとり
結城に塩瀬の素描の帯が 池の水面にゆれて
いた
京都大原三千院 恋につかれた女がひとり
- 二 京都梅尾高山寺 恋につれた女がひとり
大島紬につづれの帯が 影を落とした石畳
京都梅尾高山寺 恋につかれた女がひとり
- 三 京都嵐山大覚寺 恋につかれた女はひとり
塩沢緋に名古屋帯 耳をすませば滝の音
京都嵐山大覚寺 恋に疲れた女がひとり

歌詞はいたって単純である。京都の古いお寺に、恋につかれた和装の女がひとり佇んでいる、というだけのスケッチのような歌である。

だがこの歌詞はいろんな論点が隠されているように思える。

歌である以上、唄い出しの滑りの良さがまず重要である、一番二番の母音「オ」音の強調、三番の母音「ア」音、と取り合わせた寺の名前の響きの良さ、そこに撥音「ン」の効果的な使い方がるように思われる。京都大原三千院、京都梅尾高山寺、京都嵐山大覚寺、など音韻の響きの良さで寺を選んだのではないかと思うほどである。どうやって選択したか、もはや聞くすべを持たぬが、この点からも聴いてみたい。

寺はいずれも古刹だが、名前は聞いたことがあるが、すべてをイメージできるのは、京都の人か、よほどの京都通の人だろう。まして結城紬、大島紬、塩沢緋、塩瀬の素描の帯、つづれの帯、名古屋帯にいたっては、ほとんど知らないし触れたこともない。知らないけれどなんとなく古いお寺、佇む女性は 30 歳くらいか、高級な絹織物の和服に身を包んで、愁いを含んだ表情で佇んでいる。わ

からなくてもそれなりに場面を想像できる。

大原三千院は天台宗の寺、京都北東の山を隔てた大原の里にある。平安時代からの往生極楽隠があり、池をめぐる美しい庭園がある。

梶尾高山寺は創建奈良時代、京都北西の山の中に位置する真言宗系単立の古刹、鳥獣戯画などを所蔵している。北山杉が覆う境内は坂道が多く、石畳が敷かれた道がある。

嵐山大覚寺は右京区嵯峨にある真言宗大本山、大寺院である。嵐山からは少し離れているが、大沢の池の傍にあって、名古屋の滝跡などがある。

こうやって見ると、古刹であるというほかに特段の選定理由が見つからない。

着物はいずれも絹織物で、結城は茨城県結城市、大島紬は鹿児島県奄美大島、塩沢紬は新潟県南魚沼市で織られたもの、それに帯が加わって女性のイメージが決まる。

六輔氏は寺を選び、着物を選び、帯をセットし、一言風景描写を加えてシーンを作り上げている。この選択過程は作者にしかわからないことだが、遊び心をちりばめているような気がする。たとえば3番の「耳をすませば滝の音」は大沢の池には「名古屋の滝」跡があって、藤原公任「滝の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」という歌も詠まれ、耳をすませば滝の音が聞こえるような気がする、ということだと思えるのだが。

3年ばかり前、三国街道を越後に向かって歩いたときのことだ。湯沢宿に1泊し、山道を抜け少し開けた盆地についた。ここも雪国、街道が雁木通りとなって、ゆったりと集落を抜けている、宿場の古いイメージはなく、小ざれいな町並であった。その中に「塩沢つむぎ記念館」という瀟洒な建物があった。なんとなく通り過ぎてから「塩沢紬に名古屋帯」という「女ひとり」の歌詞が浮かび、「ああ、ここか」と偶然の出会いに嬉しくなった。それがこの文章を書くきっかけでもある。

謎かけは「池の水面にゆれていた」を「みずも」と読ませているのである。ふつうは「みなも」と読むところをなぜ「みずも」とよませるのか？ いろいろ調べたが分らない。デュークエイセスのYouTubeを聴いてみるとほとんどが「みずも」と唄っているが最後のほうになって「みなも」と表現しているのに出会った。ネットによると「みのも」と歌っている場合もあるというが、なぜそん

な使い分けをしたのか、この理由もわからない。

もう一つの謎は「恋に疲れた」と歌詞を表記しているのが多いが、三千院前にある歌碑には「恋につかれた」と刻まれている、「つかれた」の意味としてはもう一つ「憑かれた」と書けば全然違った意味となる。六輔氏はどう書いて発表したのだろう。

作詞家永六輔は放送作家、作詞家で、同じ早稲田の中村八大と組んで、ヒットを連発している。「黒い花びら」「こんにちは赤ちゃん」「遠くへ行きたい」「上を向いて歩こう」「帰ろかな」「たそがれのビギン」、多くは「夢で逢いましょう」で発表されヒットしたものだ。いずみたくとは「見上げてごらん夜の星を」があり、作詞家としての最後のシリーズとして「にほんのうた」をつくった。そこでも「いい湯だな」「筑波山麓合唱団」などがヒットした。「女ひとり」はその2作目として出されたものである。それを最後に作詞の筆を折ったという。

特別寄稿

「鉢の木」と鎌倉街道

新田自然

鎌倉街道は、鎌倉から放射状に延びた道路で、鎌倉幕府と全国を結ぶ幹線道路である。源頼朝によって整備されたもので、人の往来をはじめとして、政治、経済、軍事などに供された街道である。他にもあるが、主要なものに「上道（かみつみち）」「中道（なかつみち）」「下道（しもつみち）」があり、鎌倉と北関東、さらにその先の信州や北陸、東北に延びる道に繋がる。鎌倉街道の名称は、江戸時代になってからの呼称で、鎌倉往還、鎌倉道、鎌倉路などと呼ばれていた。

いま、私たちが歩いているのが上道で、高崎から鎌倉までの約150キロである。6月のコースとして、高崎市の南部、上信電鉄「佐野のわたし」から「高崎商科大学前」を歩いてきた。初夏の田園風景の広がる、気持ちよい歩きであった。

帰りの電車から通過駅の案内板が見え、瞬時であったが「鉢の木」という表示が見えた。その時、ふと「あれではないか」と調べてみた。あれとは…

大雪の夜、上野（こうずけ）の国佐野のあたり、一軒のあばら家に、雪に難渋した一人の旅僧が宿を求める。主（あるじ）は、一旦は断るが、困っ

ている旅僧を見るに見かねて迎え入れる。訪れる人もないみすぼらしい家、粟飯しか提供できず、寒い夜は焚火が一番の馳走と、いろりを囲んで語り合う。火を焚いて温めようとするが薪が底をついた。夜はしんと冷える。

主は庭から鉢植えの盆栽を持って来て、くべようとする。梅、松、桜の見事な盆栽だ。僧は止めようとするが、主は惜しげもなく囲炉裏にくべてしまった。

僧は、主のそれまでの話しぶりや振舞から

「あなたは名のある武士ではなかったのか」と問う。

「佐野源左衛門常世と申す」

「いかにしてこのような暮らしを」

「一族のものに横領されてしまい…」と次第を述べた。主は続けて

「しかし、このように落ちぶれてはいても、私は鎌倉武士、『いざ鎌倉』という時には、破れ装束で、痩せ馬にまたがってでも、一番に馳せ参ずる覚悟です」

見れば鎧兜も長刀も、すぐに使えるよう立て掛けてあり、奥には馬の気配もする。

僧は感じ入った風情で頷く。

春になって雪が消えるころ、鎌倉幕府から招集がかかった。伝え聞いた源左衛門は、痩せ馬を駆って、鎌倉への道を駆け上った。諸国から御家人たちが駆けつけていたが、その中に、みすぼらしい具足を付けた源左衛門があった。現れた五代執権北条時頼は

「あの時の僧は諸国見回り中の私である」と、駆けつけた源左衛門を見出し、鎌倉武士の鑑（かがみ）であると賞し、奪われた所領を安堵し、新たに梅、松、桜に因んだ庄を与えた。

以上が「鉢の木」の伝説で、謡曲にもなって、能や歌舞伎で演じられた。あらすじは江戸時代では常識ともなり、明治に至っては教科書にも収録された。私も何処かで物語を読み、感動した記憶がある。それが私の記憶の中で「鎌倉街道」、「佐野」、「鉢の木」に収斂したのだ。偶然ではあるがこの出会いに嬉しくなって、一文をしたためた次第である。

この話は実話というより、歴史上の人物をめぐる一種の説話であるが、その話の成立は、登場人物が善政を敷いた名君であるとか、愛される人物であったことが必要条件で、水戸黄門漫遊記も同

様だ。北条時頼は五代執権で、訴訟や政治の公正迅速化をはかり、庶民には善政を敷いた人物といわれる。まさに諸国巡行伝説が生まれる素地はある。

ここでのキーワードは「所領安堵」「いざ鎌倉」ではないかと思われる。鎌倉幕府は地方武士(御家人)の所領を安堵し、争いごとを裁定していた。佐野源左衛門はそのような御家人であったが、一族の争いで所領を奪われ、それで落ちぶれてしまったのだと。物語は鎌倉時代の仕組みまで背景にしている。

鎌倉幕府に「所領安堵」された御家人は「御恩と奉公」で仕える。「いざ鎌倉」という時には幕府のために働いて報うのだ。日本人受けする見事なストーリーの展開で、理屈は抜きにして小気味がよく、聞いていて気持ちがよい。勧進帳さわりも同じような気がする。

この伝説は、栃木県佐野市にもあるようで、それは「佐野」という地名に由来するものだろう。それぞれに因んだ社寺まであるそうだ。佐野のわたし駅の近くには「常世神社」というのが地図上では確認でき、屋敷跡を神社にしたとされている。栃木県佐野には「願成寺」という寺があつて、源右衛門の墓所であると言われている。ここまで話に乗るといふ遊び心が、これまた実に楽しい。

この物語は江戸時代、庶民に受けたようで、川柳のテーマとして取り上げられている。

佐野の宿雨だとすわる所無し （あばら家は雨漏りがしたはずだが大雪で…）

最明寺その夜とうとう風邪を引き （時頼は出家し最明寺殿と呼ばれた）

源左衛門鎧を着れば犬が吠え

佐野の馬戸塚の坂で二度ころび （権太坂か）

ここでいう「いざ鎌倉」という言葉、いまでも使われることがある。私たちの年代では理解できる言葉であるが、若い人には通用するか？「すわ一大事が起こった時は」、という意であろう。よくできた物語は言葉さえ生む。

私たちの歩きは、東海道をスタートして以来23年になる、お互い老骨ともなって、佐野の馬同様、鎌倉まで一気に駆けつけることは難儀だが、なお意気軒高で、鎌倉を目指し歩みを進めている。「いざ鎌倉へ」と。